

風土



芋の露
神蔵器

ほそみとは万太郎仏明易し

七月の月を上げたる神田川

ふるさとや蟬の好むと好まぬ木

盆の来る兄が残して竹箒

色のなき風一政の「ほとけさま」

八方に傾ぎあやふし芋の露
桂郎の啖呵とび出す衣被ぎ
激雷やポストの口に手を噛まれ
一步二歩三歩四歩や秋の風
草刈つて明日は己れの通る道
夏瘦とことわつてゐる生身魂
かなかなを今年聞かねば日の暮れず



竹間集

同人作品



蟬時雨

鈴木 石花

米どころ青田の中を電車行く
窯元に金継頼む喜雨の中
「哲学の径」に矢印草いきれ
囿はるる忠治の墓や炎天下
高々と八木節会碑青田風
高層となりし母校や蟬時雨
夏旺ん姪の娘主催フラメンコ

施餓鬼寺

岩木 茂

初成りの西瓜叩いて供へけり
八月や句碑を洗ひて水濁す
睡蓮を眠らす雨の瑞光寺
ぐい呑みに木雫落ちる施餓鬼寺
盆花に羞らふ桂郎碑の面
病んで久し淑子の花の竹煮草
朝顔に大雨警報出てゐたり

破れ傘

相沢有理子

朝涼の牧へ日課の草踏みぬ
破れ傘群れて靄立つ小暗がり
定番のフレンチトースト避暑の荘
茉莉花の香気仄かな夜の宴
月涼し集ふ父祖の地蔵開き
約束の日出足鈍らすはたた神
書斎涼し学ぶ姿勢の夫想ふ

尺 蠖

小林輝子

庭隅を灯せる丈に姫女苑
万緑や山に手をあて水を飲む
径なかに巳の字に果つる蠖の子
尺蠖に計られてゐる余生かな
そこそこに聾となる大夕立
二つ三つみつ四つねぐれ文字摺草
風わづか寄りては離れ今年竹

里の貌

小野寺節子

吟行の今日は七夕願掛ける
仏守り青田を守る里の貌
寒村の青田一枚神渡る
はぐれ雲七夕笹に去来せり
近江平野の青田を渡る風模様
土用鰻すんなり買つてゆく男
風鈴や故郷の南部恋ふ音色

夏帽子

田村すゝむ

梅雨真中葬に二日使ひけり
百千の向日葵雲と起ち上る
四文字で足りる別れの夏帽子
夏帽子会ふも別れも握手して
思はざる赴任の島に夏九年
銚町に雨呼ぶ屏風祭りかな
湖二日見てペンションの夏深む

がうがうと

瀬戸

悠

芍薬に真昼のしじまありにけり
がうがうと眠りの中の梅雨の川
桂郎に及ぶ話や泥鱒鍋
夕映によどむ運河や凌霄花
蚩袋路傍の墓に手向けたる
夏芝居六方踏みし馬の脚
白靴を履きし気負ひか気後れか

消夏雜詠

塩田博久

文月や一筆箋に夢二の絵
出で入りに風蘭の香やつつましく
預かりし金魚に作る日向水
扇に振るわが青春のオーデコロン
大昼寝居留守電話を決め込みて
もてなしは冷蔵庫から水出し茶
冷や麦や猪口は呉須絵の芝翫縞
氷水むかし硝子の管のれん
寝ころんで『会津士魂』を夜の秋
こほろぎや文つづる夜の更けやすく

山河集

同人作品



神蔵
器選

そらまめの匂やどの子も反抗期
葎切のこゑ垂直に湖平ら
動かせば動く九条原爆忌
三十万の御霊に誓ふ平和祭
曾て師と土用鰻をこの店に

小林 和子

マウンドに立つ炎天の芯となり
端居して目鼻忘れてをりにけり
大鍋が吊橋わたる雲の峰
白雨過ぎ古老のごとく広辞苑
完熟のトマト顔ぶつつけて喰ぶ
振り返るために駈ける児夏木立
一人では明るさ足りず合歓の花
競ひては散るために咲く沙羅双樹

浅田 光代

高村 金子

一人降り一人乗る駅つばくらめ
桃喰むや今そのことの他は無し
夜の秋バックナンバー繙きて
行き来して四万六千日の橋
大香炉とときに火を上ぐ日の盛
伝法院通りを走るラムネ売
雷除けのお札に遠くはたた神
峰雲や「イルカの見える喫茶店」
水泳の子の眼の前に竹生島
醤油屋の土間に塩噴く土用かな
炎昼を射抜いて的へ矢の走る
弓絞る音ぎりぎりど日の盛

内藤 静

池田 光子

◇特別作品◇(抄)

結葉浄土

森屋慶基

平安の大池遺構緋鯉浮く
レインロート黒ひらひらとあやめ苑
天道虫世界遺産の町に飛ぶ
片陰や仏都正午の鐘渡る
溽暑かな弁慶岩に塩噴きて
基衡の括り枕や蔵暑し
首桶の中の蓮の実咲かせけり
棺上刀湾刀の形涼しけれ
石塔婆抱く結葉浄土かな
舞草刀鍛冶場跡とや玉真葛

風土独語／神蔵器



そらまめの匂やどの子も反抗期

小林 和子

子供の反抗期は二歳から四歳までの期間に見られる第一反抗期と、思春期の第二反抗期が顕著であると言われている。たしかにその通りであるようだが、私などは、むしろその間の七、九歳のころの方がわるかった。夏休みの朝のラジオ体操に参加して、「道草くわずに帰るんだよ」と先生に言われ、「馬じゃあるまいし！」

駆け出しながら大声で返答返しをしていた。

蚕豆は秋に種子を蒔いて、翌年二、三月頃から花を咲かせ、豆類では一番早く、五月のはじめには出回る。中の豆はふつくらと平たく親指ほどの大きさだが、莢は天へ向かつて立ち、稚いさみどりは絵にも画きたいほどの美しさ、雄々しい。

一方、子の反抗期は、自我の目覚め、精神発達の過程である。特に親兄弟や周囲の親しい人と衝突したり、むやみに反対のための反抗をしたりすることがあっても、自分を認めてもらいたいためであったり、悪意などあるわけではかない。蚕豆の空へ向って、しつかり立っているような頼もしさ、ゆめがある。

父と子のはしり蠶豆とぼしたり 桂 郎

戦後のきびしい耐乏生活が、なお続いている昭和二十四年の桂

郎の作品である。

その中に父の句集や土用干し

森屋 慶基

『父の句集』は森屋けいじさんの『たにし』である。『たにし』の上梓は平成三年八月一日であったから、あれからもう二十二年も経ってしまった。

私が最後に森屋さんに会ったのは、岩手県俳人協会夏季鍛錬会から横手に向かい、森屋さんは入院中で、外泊許可をもらって横手の湯の平温泉でまっついていてくれた。亡くなる五日前であった。

森屋さんは強い薬のため頭髮が抜けていたので一瞬息をのんだが顔色もよく明るく、思っていたより元気そうにみえた。その日は車で三十分ほどの湯沢に七夕祭の絵灯籠を見にゆき、宿に戻って句会もやった。そしていつしよに温泉に入り、その夜は一つ部屋で枕を並べて寝た。

「いま、死んでも、もうすぐ御盆、すぐまた帰って来てあえるよなア」

と呟いていた。横手は旧盆、八月十三日が盆の入りである。

句集名は、かねてより朝日新聞社賞を受賞した

隠れ耶蘇田螺の道のかくれなし

より『たにし』と本人が決めており、また入院中であつたが清記も小林輝子さんに依頼して、亡くなる少し前には本人に手渡されていた。私の勝手な気休めかも知れないが、森屋さんの心中にはすでに立派に出来上つた句集が見えていたことであろう。そして長子慶基君の俳句の道を選ぶことも信じて疑うことはなかったようだ。(以下略)

風土集



神蔵器選

引き返すとき失ひて草いきれ 津山 生田恵美子

汀女句集拾壹圓の曝書かな

どしや降りに花の傾く布袋草

ガスボンベ地上に据ゑて土用市

刈り残す青鬼灯のよるべなし

青紫蘇を母伴ひぬ纏め買ひ

無職てふ雑務雑務や金魚玉

母が手の支柱あまたに鉄線花

その中に父の句集や土用干し

父の忌のすぐそこ母が草を引く

百日紅身の近く積む本の数

梅雨明くる運動場に声はづむ

夕暮れの夏風母の声聞こゆ

阿蘇山に力余せる雲の峰

まんぼうの頭を撫づる炎天下

津山 生田恵美子

横手 森屋慶基

大分 工藤はるみ

炎天へ一步踏み出す勇氣かな 千葉 小林共代

せんべいの焼く手が見えし麻暖簾

白玉や昭和の残る裏通り

水分を行きつ戻りつ生身魂

杉木立ふかき檀林お風入れ

目の奥のしきりに乾く早梅雨

音東ね路地に入り来し風鈴売

香水や個展の跋を書く羽目に

目を凝らしやや間を置きて実梅挽ぐ

草むしり蜥蜴出でしは想定外

一日に水の疲れや金魚鉢

青芭蕉未だ一葉も瑕持たず

揺らめきもせずに田水の沸きてをり

炎昼や痩せて句帳の栞紐

スモークツリーいよいよ煙り夏旺ん

川崎 遠藤逍遙子

川崎 中根美保